

一般財団法人 滋賀県民間社会福祉事業職員共済会
地域共生型社会推進事業助成金

事業完了報告書（公開用）

1、概要

報告日	西暦 2019 年 4 月 27 日
報告者	島村 恒平
助成団体名 (所属団体名)	あいとうふくしモール運営委員会
団体住所	〒 527-0165 滋賀 都道府県 東近江市小倉町1830
団体電話番号	0749 — 46 — 2170
代表者 (助成対象者)	川副 きよ子
助成対象事業	地域共生型の仕事づくりで地域課題を解決
事業（助成）期間	2018 年 4 月 1 日 ~ 2019 年 3 月 31 日
事業費総額	2,024,629 円
助成金総額	957,000 円

※住所・電話番号等は団体のものを記載し、個人情報に関わることは記載しないでください。

次ページ以降に「事業内容」、「事業成果」、「今後の課題など」を簡潔に記載してください。

注意事項

- ①共済会ホームページに掲載しますので**個人情報の掲載は禁止**します。
- ②「事業内容」、「事業成果」、「今後の課題など」は**合計5ページ以内**で作成してください。
- ③**写真の掲載は原則禁止**しますが、どうしても必要な場合は**最小限度**に留めてください。
- ④写真を掲載される場合は必ず**撮影対象の方に事前に了承を頂く**ようお願いします。
- ⑤必ず Word ファイルのまま shigakyo@cello.ocn.ne.jp へメールにてお送りください。

2、事業内容

あいとうふくしモール運営委員会は「地域の安心の拠りどころ」を目指して様々な活動を展開している。活動を行なっている東近江市（旧愛東町）では、少子高齢化の中で地域の中で様々な“困りごと”が増えてきている。地域の農業の担い手不足やひとり暮らしの高齢者、またニートやひきこもり状態にある孤立した若者たちもいる。

地元の農家がつくったお米を使用し、高齢者が昔から作ってきた味噌や梅干しを具材にして、若者たちがそれをおにぎりにして販売する。おにぎりづくりを通して地域課題の解決を目指すあいとうむすびプロジェクトを2017年よりはじめている。

。

1.ニートやひきこもり状態などにいる若者たちが“働く”を体験できる中間的就労の場づくり。

2.おにぎりの販売の拡充

2-1 新メニューの開発、

2-2 漬物や味噌等の保存食の商品開発

2-3 販売先の拡充

3.野菜の栽培

3、事業成果

1. ニートやひきこもり状態になどにある若者たちが“働く”を体験できる中間的就労の場づくり。

農場と加工場を中間的就労の場として週2回解放した。
登録は7名で、年間のべ参加者数は176名となった。

中間的就労を経たうえで一般企業に就職したり、障害者手帳を取得して作業所で働き始めた方もいる。新たな若者を受け入れる一方で、卒業していった若者たちが形を変えて参加できるようなイベントも行ってきた。企業に就職してもすぐに離職してしまう若者もいる。その時は次の仕事が決まるまでおにぎりづくりにアルバイトとして参加してもらうなどして、離職即孤立につながらないような取り組みを行ってきた。

2. おにぎりの販売の拡充

2-1 新メニューの開発、

地元の高齢者の方から八重桜の塩漬けのレシピを教えていただき、そのレシピでさくらの塩漬けを製造した。またそれを活用した「さくら」おにぎりの新メニューが生まれた。

2-2 漬物や味噌等の保存食の商品開発

地元の高齢者の方をみそづくりの講師として招き、若者と一緒のみそづくりを行なった。新しくパッケージも作り「おいしいをむすぶお味噌」として販売し始めた。また上記した桜の塩漬けも小包装にして販売できるようにした。

2-3 販売先の拡充

東近江市社会福祉協議会でのおにぎりとおにぎり弁当の販売を始めた。また、イベント出店も今年から始めて計6回のイベントでおにぎりとおにぎり弁当の販売を行なった。

3. 野菜の栽培

春夏秋冬、季節に合わせて根菜をメインに様々な野菜を栽培した。大豆、ジャガイモ、人参、ごぼう、里芋、大根、小松菜、ナス、ピーマン、ミニトマトなど。栽培には中間的就労に参加している若者とともに作業を行い、また収穫物はおにぎりの材料にしようしたり、提携しているレストランや作業所の給食に卸した。

4、今後の課題など

- ・事業の安定性

今回のこの事業を通して新メニューや新たな加工品の開発と販路開拓を行ってきた。この部分をさらに展開していけば、当初から課題であった事業の安定性は徐々に改善されていくかと思われる。

- ・事業の必要性

中間的就労の場とはなんなのかなぜそれが必要なのかなど、この事業を行っていくうえで実践の言語化をもっと丁寧していかなければいけないと感じた。支援団体同士だけでわかるような言葉で語る取り組みでなく、このような取り組みが地域の中でもっと認知されて地域住民と若者とがもっと自然に関われるような形をつくっていきたいと考えている。